

万葉集3099番歌の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the 3099th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集3099番歌「紫草^{むらさき}を 草^わと別く別く 伏す鹿の 野^{こと}は異にして 心は同じ」の解釈は、一見やさしそうに見えるけれども、歌の真意を理解するのはきわめて困難である。この歌が何を比喻しているのかまったくつかめない。例えば、結句は「心は同じ」となっているが、いったい何の心と何の心が同じなのだろうか。従来の注釈書を見ても、どれ一つとして納得のいくものはない。

本論文では、この歌を理解するための手がかりとして、この歌の直前と直後にある歌がいずれも「憤り」の気持ちを詠んだ歌であることに着目し、3099番歌もまた何らかの「憤り」を詠んだものであらうと見当をつけて解釈を試みた。その結果、ある程度納得のいく解釈が得られたので、本論文において結果を提示し、多くの方々のご批判をあおぐことにした。

1. はじめに

本論文で取り上げる万葉集3099番歌は、巻十二の「寄物陳思」の歌に分類された150首の中の一詩である。巻十二の巻頭には「古今相聞往来歌類之下」とあるから、ここでいう「寄物陳思」の「思」は主として「恋愛の思い」であることがわかる。なお、巻十一と巻十二は、上古から奈良時代までの「相聞往来」（互いに消息を尋ねあう）の歌を多数集めたものである。

本論文の目的は、万葉集3099番歌の内容を読み解くことであるが、そのためにまず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう〔1〕

12/3099 紫草^{むらさき}を 草^わと別く別く 伏す鹿の 野^{こと}は異にして 心は同じ

【原文】紫草乎 草跡別々 伏鹿之 野者殊異為而 心者同

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

① 新日本古典文学大系^[1]

【現代語訳】紫草を他の草と区別してそこに伏す鹿のように、住む野こそは違うけれども、その心持ちは同じだ。

【注釈】初句の「紫草」は重用された薬草（二〇脚注）。第四句原文の「殊異」は漢語。「(我)一切衆生と何の差別・殊異の相ある」(大宝積經四十五)、「形体・伏貌他と殊異無し」(賢愚經九)。鹿に寄せた歌。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【現代語訳】大切な紫草を 他の草と区別して 寝る鹿のように わたしたちは住む所は別々でも 心は同じだ

【注釈】紫草 一八二五。薬用・染料として貴重な植物と見なされ、多くは栽培された。 草と別く別く このワクは四段活用、区別する意。終止形の重複は、…ツツに同じ。鹿でさえ他の雑草と区別して、紫草を傷めないように除けて伏す。恋人を大切にする気持をいうのであろう。 野は異にして この野は居住空間を鹿の縁で言い換えた。

鹿に寄せる恋。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【現代語訳】紫草を他の草と区別しつつ寝る鹿のように、今伏す床は別でも紫野を選ぶ心は同じよ。

【注釈】別く別く 別け別けして。いい加減に寝るのではなく、高貴なものを区別して寝る。紫草は女性の比喩。 野は異にして 今は雑草の野に別々に寝ているが。 心は同じ 紫草を寝床として欲する心はあなたと同じ。

④ 萬葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【現代語訳】紫草を他の雑草と区別して、その上にねる鹿のやうに、鹿のねる野とは違つてゐるが、思ふところにねる心は同じです。

【注釈】紫草を草と別く別く伏す鹿の 代匠記に「紫ヲ異（コト）草トワキテ伏トヨメル歟」として諸注従つてゐる。

野は異にして心は同じ 代匠記に「鹿ノ野ニ伏スニハ異ナレド我妻ヲムツマジミテ伏スト彼ガ紫ニ伏スト心ハ同ジトヨメル歟」としたが、古義には「鹿どもの臥処^{フシド}を定めて伏ス野は、その鹿の牝^メと牡^オと、処は各別なれど、牝牡通はず心は異ならず、同じきが如く、君と吾と住处は異なれど、互になつかしむ心魂は、同じことぞ、といへるにや」として諸注多く従ふに至つた。この二句の解釈としては後者が当つてゐるやうであるが、それでは上の句が何の為にあるのかわからない。たゞ鹿の特性を表はしただけとしては少しものものしすぎる。寄物陳思の意は上三句にあるものと思はれる。さうすれば下句はそれに従つて代匠記のやうにとるべきではなからうか。全注釈に「その鹿とは、世界は違つての意」とあるのは少し現代的すぎるやうに思はれるが、「鹿の」をうけて「野」と云つたが、伏すところは違つても思ふところにねる心は同じ、と解くべきではあるまいか。

【考】夫木抄（廿八「紫」）「草とわけわけ」とある。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【現代語訳】紫草を他の草と別けながら伏す鹿が、夫婦で別の野に伏しても心は一つであるように、私とあなたとは別れ別れにいても心は一つなのです。

【注釈】紫草 ムラサキ科の多年生草本。根から紫色の染料をとる。古代の重要な染料なので各地で栽培。 別く別く 別け別け。現在では動詞を二つ重ねるときに連用形で重ねるが、この頃は終止形を重ねるのが例。

上に示した3099番歌に関する五つの先行研究を見ると、大ざっぱに言って、歌の前半部を「紫草を他の草と区別して伏す鹿のように」、後半部を「あなたとわたしは違う所にいても心は同じ」と解している点ではほぼすべて共通している（ただし、④の後半部はほかと少し異なる）。

次の第2節では、まず上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

まず3099番歌の前半部「紫草を草と別く別く伏す鹿の」について検討しよう。先行研究の現代語訳はすべて、この部分を「紫草を他の草と区別してそこに伏す鹿のように」と解している。この解釈は、④の注釈でも指摘されているように、万葉代匠記の解釈「紫ヲ異（コト）草トワキテ伏トヨメル歟」に従っているようである。

ところが、現実問題として、どうして鹿は紫草を他の草と区別するのであろうか。そもそも、なぜ区別できるのであろうか。紫草は、人間でさえ、それが有名な紫草であることを知らない人にとっては、ただの雑草にしか見えない目立たない草である。こんな草を鹿がどうして他の草と区別する必要がある、どうして区別できるのだろうか。従来の解釈は、まずこの基本的な疑問に明確な根拠をもって答えられない限り成立しえないのではなかろうか。

この点に関連して、②は注釈で、

鹿でさえ他の雑草と区別して、紫草を傷めないように除けて伏す。恋人を大切にしたい気持ちというのである。

とコメントしているが、鹿が人間の大事にする紫草を気遣って「紫草を傷めないように除けて伏す」などということはオトギ話の世界でしかありえない話である。昔から、農家の人々が、イノシシなどの野生動物による被害にいかにか苦労してきたかを思えば、このようなコメントは現実の世界とオトギ話の世界を混同しているとは思えない。また、③は、

いい加減に寝るのではなく、高貴なものを区別して寝る。紫草は女性の比喩。

とコメントしているが、そもそも歌の表向きの解釈（鹿が紫草と他の草を区別する）が疑わしいのに、裏の意味である比喩をあこれ憶測で付け足しても説得力を増すことはないだろう。

このように、歌の前半部の解釈については大いに疑問があるが、とりあえず議論を先に進めるために、以下ではこの疑問には目をつぶり、理由はともかく「鹿は紫草と他の草を区別して伏す」ものだと仮定し

て話を進めよう。

そこで次に、3099番歌の後半部「野は異にして心は同じ」の問題点について考える。①、②、③、⑤は、それぞれ表現上の違いはあるけれども、第四句の「野」を「住む(寝る)所」と見なし、歌の後半部を「(鹿の雄と雌が寝る所が違うように)(あなたと私の)住む所は違っても心は同じだ」と解している。百科事典を調べてみると、確かに、ニホンジカの社会構造は、母子群、雄群、発情期に一時的な雌雄混合群からなるようであり(SuperNipponica 2001、小学館)④の鹿持雅澄の万葉集古義が言うように「鹿の雄と雌が寝る所が違う」というのはある程度事実在即しているようにも思われる。しかし、「鹿の雄と雌が寝る所が違う」ということを導くために、歌の前半部になぜ「鹿が紫草と他の草を区別する」ということを言う必要があるのか、この点の説明がつかない。一方、④は、歌の後半部の意味が少し不自然になることは認めながらも、歌の前半部とのつながりを重視して、万葉代匠記の解釈に従い「(人が寝る所は)鹿が寝る野とは違っているが、鹿が紫草を選んでその上に寝ようとする心は、男が愛する妻の所に寝ようとする心と同じ」と解している。この解釈だと、歌の前半部とのつながりは何とか保てるけれども、「男が愛する妻の所に寝ようとする心」と「鹿が紫草の上を選んで寝ようとする心」が奈良時代の多くの人々にとって本当に共感を得るほど「同じ」だったのだろうかと素朴な疑問を抱かざるを得ない。多くの人々の共感なしには歌の比喻は成り立たないからである。

さらに、第四句の「野は異にして」の「異」は原文では意図的に「殊異」と表記されているが、この意図を汲み取るには、第四句の「異にして」は単に「異なって」と解しただけでは不十分で、「異常なほど異なって」(あるいは「特別に異なって」)と解さなければならない。しかし、このような解釈は先に示した五つの先行研究のどの解釈に対しても違和感がある。

以上見てきたように、前節に示した先行研究(①から⑤)の解釈には、歌の前半部にも後半部にも問題点があり、十分納得のいく解釈とは言えない。ここで注目したいのは、これらの先行研究はいずれも3099番歌を「単独の歌」として解釈を試みており、この歌の前後の歌との関係などまったく考慮されてないことである。

3. 万葉集3099番歌の新しい解釈

本論文では、3099番歌を理解するための手がかりとして、この歌の直前と直後にある歌に着目する。3099番歌の直前にあるのは次の歌である。この歌には作歌の背景を示す左注が付いているので、その現代語訳もいっしょに示す[1]

12/3098 おのれ故^の 罵らえて居れば 青馬の 面高^{おもたか}夫^ぶ駄^だに 乗りて来べしや

【現代語訳】お前ゆえに私が叱られているのに、灰色の顔面の長い駄馬などに乗って来てよいものか。

【左注の現代語訳】右の一首は、平群文屋朝臣益人伝によると、「昔聞くところでは、紀皇女がひそかに高安王と通じて叱責された時、この歌を作った。高安王は左遷されて、伊予国守に任ぜられた」。

次に、3099番歌の直後にある歌を示す[1]

12/3100 思はぬを 思ふと言はば 真鳥住む 雲梯^{うなて}の杜の 神し知らさむ

【現代語訳】思ってもいないのに思っていると言ったら、驚が住む雲梯の社の神がお見通しでしょう。

以上の二つの歌の内容を見ると、いずれも相手を非難する「憤り」の歌であることは一目瞭然である。だとすれば、万葉集編纂者によっておそらく意図的にこの二つの歌の間に割り込んで配置された3099番歌もまた、似たような「憤り」の気持ちを詠んだ歌である可能性が高い。万葉集の歌は、似た内容の歌をまとめて配置することが多いからである。以下、この視点から3099番歌を解釈してみよう。

まず新しい解釈の結果を示し、その後に具体的な根拠を個別に示していくことにしよう。まず3099番歌の訓読、直訳、意識を示す。

【訓読】紫草を^{むらさき} 草と^わ別く別く 伏す鹿の^{こと} 野は異にして 心は同じ

【直訳】紫草を（普通の）草のようにかき分け、かき分けして寝そべっている鹿のいる（紫草の）野は、きわめて「異常な」光景であり、（今の私の）心は（そうした光景を目にしている人の心と）同じです。

【意識】大切な紫草を、その辺の雑草と同じようにかき分け、かき分けして鹿が寝そべっている紫草の野の光景は、紫草の栽培主にとっては怒り心頭に発する「異常事態」であり、憤りのあまり棒をもって飛んで行き鹿を追い払うであろう…いま私があなたに対して抱いている「憤り」の気持ちは、このような紫草の野の光景を目にしている栽培主の「憤り」と同じです。

このように解すると、歌の前半部をオトギ話の世界としてではなく、現実の世界の出来事として理解することができる。そこで次に、このような解釈が可能である根拠について確認していこう。

まず、第二句「草と別く別く」の「別く」の意味について検討する。第二句の原文は「草跡別々」と表記されているが（第1節を参照）万葉集の原文で「別」と表記された約70例のうち、今問題の3099番歌を除き、また「別」が名詞的に用いられているものや「わかる」（別れる）「～ごと（別）」と訓むものを除くと、他動詞的用法の14例だけが残る。そのうち12例は「かき分ける」（あるいは「振り分ける」）の意味で用いられている。以下に二例だけ示す（カッコ内は原文）。

10 / 2153 秋萩の 咲きたる野辺は さ雄鹿そ 露を[・]分けつつ（露乎別乍） 妻問ひしける

13 / 3279 葦垣の 未かき[・]別けて（未搔別而） 君越ゆと 人にな告げそ 事はたな知れ

これに対して「別」が「（二つ以上のものを）区別する」の意で用いられているのはわずか2例のみで、「夜昼わかず（夜昼不別）」（2902番歌）と「別くこと難き（別事難）我が心かも」（2171番歌）である。ここで注目したいのは、「別」が「区別する」の意で用いられている2例は「夜昼」や「我が心」のように具体的な形のないものの区別に用いられており、一方、「かき分ける」（あるいは「振り分ける」）の意で用いられている12例は雲、胸、露、髪、葦などすべて具体的な形のあるものに対して用いられている。以上の結果から、3099番歌の第二句「草と別く別く」の「別く」は、具体的な形のある「草」に対して用いられていることから、通説のように「（他の草と）区別する」という意味にとるよりも、新しい解釈で示したように「（鹿が草を）かき分ける」という意味にとる方が、万葉集の「別」の一般的な用法に即した解釈と言える。

次に、第四句の「野は異にして」の意味について考えよう。原文では「野者殊異為而」と表記されている。ここで「殊異」という表記に注目したい。もし第四句の意味が、単に「野は異なって」という意味であるならば、作者は「野者異為而」と表記すればよいはずで、実際これでも「野はこと（異）にして」と訓める。にもかかわらず、作者はわざわざ「異」だけでは思い足りなくて「殊異」と表記して「野はこと（殊異）にして」と訓ませている。したがって、第四句は単に「野は異なって」と解しただけでは不十分

で、「野は異常なほど異な[・]って」と解釈しなければならない。ところが、このような第四句の解釈は、従来のどの解釈に対しても違和感がある。一方、新しい解釈に対してはまったく違和感はない。大事にしていた紫草を鹿が荒らしまわっている光景は、単なる「異」という表現ではもの足りず、まさに「殊異」という表現こそがふさわしいからである。

さて、もし仮に本節で示したような新しい解釈が正しいとするならば、この歌の「憤り」はいったいどのようなものだろうか。最後にこの問題について考えてみたい。もちろん確かなことはわからないけれども、ある程度推測することはできる。一つの手がかりは、3099番歌が収録されている巻十二の巻頭に「古今相聞往来歌類之下」とあることである。これから、3099番歌の中心テーマは「恋愛」であることが推測できる。実際、3099番歌の前や後に配置された多くの歌を調べてみると、ほとんどすべて恋愛の歌ばかりである。よって、3099番歌が「恋愛」にまつわる「憤り」の歌であることはほぼ確実である。

以上のことを念頭におき、単なる憶測にすぎないが、考えられるケースを二つ示しておこう。一つのケースは、例えば、ある女性が、今まで信じてきた恋人がとても信じられないような不誠実な行為をとるのを目にした(あるいは噂に聞いた)ときの「憤り」の歌と解するものである。もう一つのケースは、例えば、ある母親が、このうえなく大事にしている娘(紫草で比喻)を、この男とだけは絶対に付き合わせたくないと思っていた、まさにその男(鹿で比喻)が娘を口説き落とし、ついに娘と関係をもつに至ったことを知った(あるいは目撃した)ときの母親の「憤り」の歌と解するものである。

4. おわりに

本論文では、これまで単独の歌としてのみ解釈が行われ、内容が難解で解釈が定まらなかった万葉集3099番歌について再検討を行い、この歌の直前と直後にある歌がいずれも「憤り」の気持ちを詠んだ歌であることに着目し、3099番歌もまた「憤り」の気持ちを詠んだものであろうと見当をつけて解釈を試みた。その結果、歌の意味(比喻)がある程度明確に理解できるようになった。歌の内容からして、おそらく恋愛に関する女性の「憤り」を詠んだ歌だと推測されるが、具体的な内容については未詳で、ただ憶測に頼るしかない。本論文で示したような解釈がはたして妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をあおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集 三」, 新日本古典文学大系、岩波書店、pp.187-188、2002年。
- [2] 「万葉集③」, 新編日本古典文学全集、小学館、p.352、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注(三)」, 中西進、講談社文庫、pp.151-152、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十二」, 澤瀉久孝、中央公論社、pp.206-207、1963年。
- [5] 「万葉集 三」, 日本古典文学大系、岩波書店、pp.306-307、1960年。